

現代文問題集⑥

【記述式特化篇・第三】

目次

【第一問】	偶然とは何か	… 2ページ
【第二問】	制度は偶然をどう扱うか	… 11ページ
【第三問】	評価とは何か	… 19ページ
【第四問】	責任とは何か	… 27ページ
【第五問】	「硝子戸の向こう」	… 36ページ
【第六問】	起こらなかったこと	… 48ページ
【第七問】	検定という言葉	… 56ページ
【第八問】	言いすぎた夜	… 65ページ
おわりに		… 74ページ

【第一問】 偶然とは何か

私たちは日常の中で、「偶然」という言葉を頻繁に用いる。街で旧友に再会したときも、投げた硬貨が裏を向いたときも、あるいは予期せぬ事故が起きたときも、私たちはそれを「偶然」と呼ぶ。しかし、この言葉が指しているものは、果たして同一の性質を持つ出来事なのだろうか。あるいは、「偶然」という語は、出来事の性質を表すというよりも、むしろ私たちの理解の仕方を示す印なのではないか。

科学の領域に目を向けると、「偶然」はしばしば確率という概念と結びつけられる。確率とは、ある結果が生じる頻度を数学的に記述する枠組みであり、硬貨が表になる可能性が二分の一であると述べるとき、そこには無秩序の肯定ではなく、むしろ規則性の把握が含まれている。量子力学においても、個々の事象の発生は確率的にしか予測できないとされるが、その確率分布自体は厳密な数式によって定式化される。つまり、科学における「偶然」は、無秩序や混乱の別名ではなく、一定の法則のもとで扱われる不確定性を意味している。

しかしここで注意すべきなのは、確率によって記述できることが、直ちに「原因がない」ことを意味するわけではないという点である。古典力学の枠組みでは、理論上はすべての出来事が因果の連鎖の中に位置づけられると考えられてきた。ある状態が与えられれば、その後の状態は原理的には決定されるという発想である。ここでは、「偶然」とは単に、原因を十分に把握していないことの言い換えにすぎない。すなわち、私たちの知識の限界が「偶然」という語を生むのであって、出来事そのものに偶然性が内在しているわけではない、という立場である。

一方で、出来事の因果関係が完全に解明されたとしても、なお「偶然」という感覚が消え去るわけではない。たとえば、何十万人の都市の中で、特定の二人が同じ場所であう確率が極めて低いと知ったとしても、その出会いを経験した本人にとっては、それが「偶然のめぐりあい」であるという感覚は残るだろう。ここで問題となるのは、偶然が統計的な希少性の問題であると同時に、意味づけの問題でもあ

るという点である。

私たちは出来事を単なる事実として受け取るのではなく、しばしばそれを物語の一部として再構成する。偶然の出会いには運命へと昇格し、偶然の事故は不条理の象徴となる。このとき、偶然とは因果関係の欠如を示す語ではなく、出来事が私たちの期待や予測の枠組みから外れていることを示す標識となる。言い換えれば、「偶然」とは出来事の性質ではなく、私たちがそれをどう受け取るかという態度の問題なのである。

ここで、偶然を「因果の網からこぼれ落ちたもの」と考える立場と、「因果の網はあるが、それを把握しきれないことの表現」と考える立場とを区別することができる。前者は世界そのものに不確定性が宿ると見る立場であり、後者は不確定性を人間の認識の限界に帰する立場である。両者は対立するようであり、いずれも偶然を出来事の内側に探そうとする点では共通している。

しかし、偶然を出来事の内部に探すこと自体が、問いの立て方として適切であるとは限らない。偶然という語は、出来事の構造を記述するための科学的概念というよりも、むしろ出来事と私たちの理解との間に生じるずれを示す言葉なのではないか。私たちがある出来事を予測できなかったとき、それを説明する枠組みがまだ整っていないとき、あるいはその出来事が私たちの物語を大きく書き換えるとき、私たちはそこに「偶然」という名を与える。

そうであるならば、偶然とは世界の側にある性質というよりも、世界と向き合う私たちの位置取りを示す概念であると言えるだろう。出来事がどのように生じたかという問いとは別に、私たちがそれをどのように受け止め、どのような意味を付与するのかという問いが存在する。そしてその問いのほうに、しばしば私たちにとっては決定的である。

偶然を完全に排除した世界を想像することは難しい。しかしそれ以上に難しいのは、偶然を単なる無秩序として片づけることである。偶然という言葉を用いるとき、私たちは出来事の原因を放棄しているのではなく、自らの理解のあり方を告白して

いるのかもしれない。偶然とは何か、という問いは、世界がどのように出来ているかという問いであると同時に、私たちが世界をどのように理解しようとしているかという問いでもあるのである。

設問 ※各問60〜80字程度で答えよ。

問一

本文において、「科学における偶然」とはどのような意味で用いられているか。簡潔に説明せよ。

問二

筆者は、「偶然は原因の欠如ではない」と述べる。この主張の内容を本文に即して説明せよ。

問三

本文では、「偶然」は出来事の性質ではなく、私たちの態度の問題である可能性が示されている。なぜそのように言えるのか説明せよ。

問四

本文において、「偶然」と「物語化」の関係はどのように位置づけられているか説明せよ。

問五

筆者は、「偶然を出来事の内部に探すこと自体が問いの立て方として適切であるとは限らない」と述べる。この一文の意味を説明せよ。

問六

本文全体を踏まえ、「偶然とは何か」という問いが最終的にどのような問いへと転換しているか説明せよ。

解答・解説

【全体総括】

本文は、「偶然」という日常的語を出発点にしながら、それを出来事の性質としてではなく、私たちの認識や意味づけの仕方として再定義していく構造を持つ。科学的確率、因果論、物語化という三つの層を経由し、最終的には「世界が偶然かどうか」ではなく、「私たちが世界をどう理解しているか」という問いへと焦点を転換している点が核心である。したがって、各設問では、出来事そのものではなく、認識の枠組みの変化を正確に捉えられているかが重要となる。

問一

模範解答

科学における偶然とは、無秩序を意味するのではなく、一定の法則のもとで確率的にしか予測できない不確定性を数学的に扱う概念として用いられている。

別解例①

本文での科学的偶然は、原因がないことを示す語ではなく、確率分布に従う現象を法則的に記述するための枠組みとして理解されている概念である。

別解例②

科学における偶然とは、混乱や無法則を指すのではなく、数式により定式化された確率的振る舞いとして整理される不確定性を意味している。

自己採点チェック

- 無秩序と区別しているか
- 確率や法則への言及があるか
- 「予測できない」だけで終わっていないか
- 科学的枠組みとして説明できているか

問二

模範解答

筆者は、偶然を原因の欠如と見るのではなく、原因を把握できていないことの表現にすぎない場合があると述べ、偶然を認識の限界と結びつけている。

別解例①

本文では、偶然が出来事に原因がないことを示すのではなく、私たちが因果関係を十分に理解していない状態を指す語である可能性が示されている。

別解例②

筆者は、偶然とは因果が存在しないことではなく、因果の全体像を把握できない人間の側の制約を表す概念であると説明している。

自己採点チェック

- 原因の有無と認識の限界を区別しているか
- 「因果」に触れているか
- 偶然を出来事内部の性質と断定していないか
- 筆者の立場を正確に反映しているか

問三

模範解答

偶然は出来事そのものの性質ではなく、私たちの予測や期待の枠組みから外れたときに与えられる名であると本文は述べており、意味づけの態度の問題であると示している。

別解例①

本文では、偶然とは出来事の内側にある性質ではなく、それが私たちの理解や物語の枠を超えたときに生じる呼称であり、受け取り方に依存すると説明される。

別解例②

筆者は、偶然を世界の属性ではなく、私たちが予測できず物語を書き換えられるときに用いる概念と捉え、認識の態度に属するものと論じている。

自己採点チェック

- 出来事の性質と区別できているか
- 予測や期待への言及があるか
- 態度・認識の問題であることが示されているか
- 「意味づけ」の観点が含まれているか

問四

模範解答

本文では、偶然の出来事が私たちにによって物語の一部へと再構成されることで意味を帯びるとされ、偶然は事実そのものよりも意味づけの過程と結びついている。

別解例①

筆者は、偶然が単なる事実ではなく、出会いや事故が物語化される過程で意味を持つと述べ、偶然と物語化を密接に関連づけている。

別解例②

本文では、偶然の出来事は統計的希少性だけでなく、それがどのように物語として再解釈されるかによって意味を持つと説明されている。

自己採点チェック

- 物語化への言及があるか
- 意味づけとの関係が示されているか
- 単なる希少性説明に終わっていないか
- 本文の具体例を踏まえているか

問五

模範解答

筆者は、偶然を出来事の内部に探すのではなく、出来事と私たちの理解とのずれに

注目すべきだと述べ、問いの立て方自体を見直す必要があると示している。

別解例①

本文では、偶然を世界の性質として捉えるよりも、私たちの理解の枠組みとの関係で考えるべきだとし、問いの焦点を出来事から認識へ移している。

別解例②

筆者は、偶然を出来事そのものに求める姿勢を再考し、出来事と理解との間に生じるずれに目を向けることが重要だと論じている。

自己採点チェック

- 「問いの立て方」に触れているか
- 出来事内部から認識へ視点に移っているか
- ずれ・関係性が示されているか
- 抽象を具体的に説明できているか

問六

模範解答

本文では、偶然とは世界の構造そのものを問う語であると同時に、私たちが世界をどのように理解し意味づけているかを問い返す概念へと転換されている。

別解例①

筆者は、偶然の問題を世界の不確定性の問題から、私たちの理解や意味づけのあり方を問う問題へと転換し、認識論的問いへ導いている。

別解例②

本文は、偶然という語を通して世界の性質よりも理解の仕方を問題化し、世界観そのものを問い直す方向へ議論を進めている。

自己採点チェック

- 世界の性質と認識の区別が示されているか
- 転換の方向を捉えているか

- 「問い」の変化に言及しているか
- 本文全体の構造を踏まえているか

【第二問】制度は偶然をどう扱うか

制度とは、社会の中で生起する出来事を、一定の基準と手続きに従って処理するための枠組みである。私たちは日常的に制度の中で生きている。学校では成績が数値化され、企業では評価が等級に変換され、税制では所得が段階ごとの負担へと分類される。ここでは個々人の事情や偶発的な出来事は、そのままの形では扱われない。制度はまず、それらを共通の尺度へと翻訳する。

たとえば入試制度を考えてみよう。受験生一人ひとりの学習環境、家庭状況、体調、当日の心理状態は大きく異なる。それにもかかわらず、最終的には点数という単一の数値によって合否が決まる。点数は能力のすべてを表しているわけではないが、制度はその数値をもって処理を完了させる。複雑な背景は切り落とされ、比較可能な形へと整形されるのである。

保険制度も同様である。事故や病気は本来、個別で偶発的な出来事である。しかし保険会社は過去の統計を用いて発生確率を算出し、保険料を設定する。ここでは不運は統計上の数値へと変換される。個人にとっては予測不能な出来事も、全体としては「一定割合で起こるもの」として計算される。偶然は確率へと置き換えられる。

司法制度においても、偶然は特定の形式へと変換される。ある事故が不注意によるものか、不可抗力によるものかは、条文や判例に照らして判断される。事情は千差万別であっても、最終的には責任の有無という二分法へと整理される。ここでは、複雑な経緯が法的カテゴリーへと翻訳される。

このように制度は、偶然を減らす装置のように見える。予測できない出来事も、あらかじめ定められた枠内で処理される。災害対策においても、想定規模が設定され、避難計画や備蓄量が決められる。未来は完全には予測できないが、制度は「想定内」という範囲を設けることで不確実性を抑え込もうとする。制度とは、不確実な世界を扱うための秩序装置である。

しかし、ここで重要なのは、制度は偶然を消しているのではないという点である。制度はむしろ、偶然の存在を前提に設計されている。保険は事故が起こることを前提にしているし、試験は能力差があることを前提としている。生活保護制度もまた、所得の不均衡や失業といった偶然的な要素が生じることを前提に構築されている。制度は偶然を排除するのではなく、それを一定の形式のもとで受け止める仕組みなのである。

さらに踏み込めば、制度は偶然を再配分する。保険制度では、一部の人に集中した損失が多数の加入者へと分散される。税制では、所得の偶然的な差が再分配を通じて調整される。入試制度では、定員という制約のもとで合格者と不合格者が分けられ、成功と失敗が制度的に確定される。ここで偶然は消えるのではなく、別の形で社会の中に配置される。

制度は公平を目指すが、その公平は常に「一定の基準に従った公平」である。どのような尺度を採用するか、どの範囲を想定内とするか、どこまでを例外とするか――それらの決定自体が新たな偏りを生む可能性を含んでいる。制度は偶然を均すが、均し方によっては別の偶然を生み出す。

したがって、制度を理解するとは、偶然の流れ方を理解することにほかならない。偶然は消えない。ただ、その形が変わるだけである。制度とは、偶然をゼロにする装置ではなく、偶然を引き受け、分配し、再配置する装置なのである。社会が安定して見えるとき、それは偶然が消えたからではなく、偶然が制度の内部で配置換えされ続けているからにすぎない。

設問 ※各問120字程度で答えよ。

問一

制度が偶然を「減らす」とはどのような意味か。本文に即して説明せよ。

問二

制度が偶然を前提として設計されているとはどういうことか。説明せよ。

問三

制度が偶然を「再配分する」とはどのような意味か。説明せよ。

問四

本文全体の論理展開を説明せよ。

問五

筆者は制度を批判しているのか。それとも再定義しているのか。理由とともに述べよ。

解答・解説

【全体総括】

本章は、「制度は偶然を排除する装置である」という通念的理解から出発し、その理解を段階的に転換していく構造を持つ。

第一段落から第四段落では、制度が出来事を共通尺度へ翻訳し、不確実性を抑える仕組みとして機能していることを具体例とともに示す。ここでは制度は「偶然を減らす装置」として描かれる。

しかし中盤以降、制度は偶然を消しているのではなく、むしろ事故・能力差・格差といった偶然的差異を前提として設計されていることが明らかにされる。制度は排除ではなく、管理と受容の装置である。

最終段階では、制度は偶然を再配分する装置であると再定義される。偶然は消滅せず、制度内部で分散・再配置されるだけであるという視点へと読者は導かれる。

読解の核心は、

- 「排除」と「管理」の違い
- 「前提にする」という概念の理解
- 「再配分」という抽象概念の把握
- 三段階構造の論理転換にある。

制度を理解するとは、偶然の流れ方を理解することである、という結論を正確に掴めるかが本章の到達点である。

問一

模範解答

制度が偶然を減らすとは、個々人の事情や偶発的な出来事をそのまま扱うのではなく、点数や確率、法的区分などの共通尺度へと翻訳し、一定の枠組みに沿って処理可能な形へ整えることで、不確実性を抑え社会全体の予測可能性を高めることを指

す。

別解例①

制度が偶然を減らすとは、多様で予測困難な出来事を、試験の点数や統計的確率のような共通基準に置き換え、あらかじめ定められた手続きの中で処理できる形に変換することである。そうすることで出来事のばらつきを抑え、社会の見通しを立てやすくすることを意味する。

別解例②

制度が偶然を減らすとは、個別で偶発的な事象を、数値や規則といった共通の形式に翻訳し、事前に設定された枠内で整理・処理することにより、不確実性を一定範囲に封じ込めることである。出来事を型に収めることで予測可能性を確保するという意味である。

自己採点チェック

- ・ 「翻訳」「変換」「共通尺度」などの構造に触れているか
- ・ 不確実性の抑制という視点があるか
- ・ 予測可能性に言及できているか
- ・ 単なる「整理」とだけ書いていないか

問二

模範解答

制度は事故や能力差、所得格差などの偶然的な差異が生じることをあらかじめ想定して構築されているということである。保険は事故発生を前提に成立し、試験は能力差の存在を前提に機能する。制度は偶然を排除するのではなく、それを受け止め管理する仕組みなのである。

別解例①

制度が偶然を前提としているとは、事故や失敗、格差といった予測不能な出来事が発生することを想定した上で、その発生を織り込んで設計されているという意味で

ある。制度は偶然をなくすためではなく、偶然が起こることを見越して対応する枠組みである。

別解例②

制度が偶然を前提にすると、能力差や不運、災害などの不確実な出来事が存在することを想定し、その発生を条件として機能しているということである。制度は偶然を消す装置ではなく、偶然を引き受け処理するために構築された仕組みなのである。

自己採点チェック

- ・ 「想定」「前提」という語の意味を具体化できているか
- ・ 保険や試験などの例を根拠として挙げているか
- ・ 排除ではなく受容・管理である点に触れているか

問三

模範解答

制度が偶然を再配分するとは、ある個人や集団に集中した不運や差異を、保険や税制、入試の枠組みなどを通じて別の人々や社会全体へと分散・確定させることを指す。偶然を消すのではなく、社会内部で配置換えし直すことで新たな秩序を形成するという意味である。

別解例①

制度が偶然を再配分するとは、一部の人に集中する事故や損失、成功や失敗といった偶然的結果を、保険制度や税制、定員制などによって他者や全体へと分散させることである。偶然をなくすのではなく、その影響の所在を社会的に組み替えることを意味する。

別解例②

制度が偶然を再配分するとは、個々人に偏在する不運や能力差を、一定の規則のもとで分散・確定させ、社会の中で別の位置へ移し替えることを指す。偶然は消滅す

るのではなく、制度の内部で形を変えて再配置されるという意味である。

自己採点チェック

- 「分散」「移し替え」「配置換え」などの動きが書けているか
- 偶然是消えないという点に触れているか
- 具体制度に根拠づけられているか

問四

模範解答

本文はまず制度を偶然を減らす装置として提示し、出来事を共通尺度へ翻訳する動きを示す。次に制度が偶然を前提として設計されていることを明らかにし、最後に制度を偶然の再配分装置として再定義する構造をとる。排除から管理、さらに再配置へと視点が転換している。

別解例①

本文は制度を不確実性を抑える装置として説明した後、偶然の存在を前提にしている点を示し、最終的に制度を偶然の再配分装置と位置づける三段階構成である。偶然の減少という理解を修正し、制度の働きをより抽象的に再定義する展開になっている。

別解例②

本文は制度を偶然を処理する仕組みとして論じ、当初は減少装置と捉えられる見方を提示する。その上で偶然を前提とする性格を示し、最後に偶然を再配分する装置と再定義する流れである。視点を段階的に転換させながら制度観を深化させている。

自己採点チェック

- 三段階構造を捉えているか
- 転換点を明確に示せているか
- 再定義という語の意味を理解しているか

問五

模範解答

筆者は制度を単純に批判しているのではなく、その働きを再定義している。制度は偶然をなくす装置ではないという点を明らかにしつつも、偶然を引き受け分配し直す仕組みとして位置づけている。制度の限界を示しながらも、その機能を分析的に捉えているのである。

別解例①

筆者は制度を否定しているのではなく、その性質を再定義している。制度が偶然を排除するという通念を修正し、偶然を前提に再配分する装置と捉え直しているからである。批判というより、制度の構造を明確化する分析的立場をとっている。

別解例②

筆者は制度を単なる抑圧装置として批判するのではなく、偶然を管理し再配置する仕組みとして再解釈している。制度の公平性に潜む偏りを示しつつも、その機能そのものを否定してはいないため、立場は再定義に近いといえる。

自己採点チェック

- 批判と再定義の違いを説明できているか
- 本文根拠に基づいているか
- 単なる意見表明になっていないか

【第三問】評価とは何か

私たちは日常的に評価の中で生きている。学校ではテストの点数や通知表が示され、企業では人事考課によって昇進や給与が決まる。スポーツでは記録が順位を決め、商品には星の数がつき、SNSでは投稿が「いいね」の数によって可視化される。就職活動では面接官の判断が合否を左右し、資格試験では一定の基準点が合格を分ける。私たちの生活の多くは、何らかの評価を通して秩序づけられている。

評価は、限られた資源をどのように配分するかを決めるための装置である。大学の定員、企業のポスト、補助金や奨学金の枠など、社会には常に制約がある。その中で選抜を行うには、何らかの基準が必要となる。評価は複数の人や物を比較可能にし、判断を迅速にする。数値や段階といった共通尺度を用いることで、主観的な印象を一定程度整理できる。評価がなければ、意思決定は混乱し、配分は恣意的になりかねない。

さらに、評価は努力の方向づけにも作用する。成績が示されることで学習の目標が明確になり、業績評価があることで業務への動機づけが生まれる。評価は単に結果を示すだけでなく、行動を調整する機能を持つ。評価の存在によって、人は自らの位置を知り、改善の目安を得る。こうした意味で、評価は社会の運動を支える不可欠な仕組みである。

しかしその一方で、評価は必然的に単純化である。人の能力や人格、努力の過程、偶然の影響は本来多面的であり、ひとつの数値や記号に還元できるものではない。それにもかかわらず、評価は複雑な現実を切り取り、特定の尺度に従って整理する。点数は学力の一部を示すにすぎないが、しばしばその人全体を代表するかのよう扱われる。評価は、理解を容易にする代わりに、多くの側面を切り落とす。

この単純化は、ときに見えない影響をもたらす。低い評価を受け続けた人は、自らを「できない人間」とみなすようになることがある。逆に高い評価を受けた人は、その評価を維持しなければならぬという圧力を感じる。評価は単なる記録ではな

く、自己理解や行動の選択に影響を及ぼす力を持つ。評価は結果を示すだけでなく、未来を方向づける作用を持つのである。

さらに重要なのは、評価が関係を固定するという点である。一度「優秀」「平均」「不振」といったラベルが貼られると、その印象は持続しやすい。周囲の期待や扱い方が変わり、その人の行動もそれに応じて変化する。評価は出来事の説明であると同時に、関係の構造を作り直す働きを持つ。評価によって形成された序列は、その後の機会の分配にも影響する。

ここで見落とされがちなのは、評価が常に他者のまなざしを含んでいるということである。自己評価であっても、それは他者の基準や社会的尺度を内面化した結果である場合が多い。私たちは他者からどう見られているかを想像しながら自分を評価する。評価とは、単なる数値ではなく、他者との関係の中で生じる作用なのである。

もちろん、評価を完全に廃することはできない。評価がなければ、選抜も配分も方向づけも困難になる。しかし評価が単純化であり、関係を固定し、他者のまなざしを内包していることを忘れれば、私たちはその数値や記号を過度に実体化してしまふ。評価は現実そのものではなく、現実を一定の仕方で切り取った像にすぎない。

したがって重要なのは、評価を否定することでも、無条件に信頼することでもない。評価が何を切り取り、何を捨てているのかを意識することである。評価は必要な装置であるが、同時に限定的な装置でもある。その両面を理解したとき、私たちは評価に従うだけの存在ではなく、評価を扱う主体となることができる。

設問 ※各問120字程度で答えよ。

問一

評価が社会にとって必要とされる理由を、本文に即して説明せよ。

問二

評価が「単純化」であるとはどういうことか。本文に即して説明せよ。

問三

評価が「関係を固定する」とはどういう意味か。本文に即して説明せよ。

問四

本文における筆者の立場の転換はどの段階で起こるか。その転換の内容を説明せよ。

※プロセス意識化問題

問五

筆者は評価を否定しているのか。それとも再定義しているのか。理由とともに述べよ。

解答・解説

【全体総括】

本文は、「評価は社会に必要な装置である」という肯定的理解から出発し、その性質を段階的に掘り下げていく構造を持つ。

前半では、評価が資源の配分や選抜を可能にし、比較や意思決定を円滑にする機能を持つことが具体例とともに示される。ここでは評価は社会を支える合理的な仕組みとして描かれる。

しかし中盤で「しかしその一方で」という転換が置かれ、評価が単純化であることが明らかにされる。人の多面性が一側面へ還元される点、切り落とされる要素が存在する点が指摘される。

さらに議論は進み、評価は単なる整理ではなく、関係を固定し、将来を方向づける作用を持つことが示される。評価は記録にとどまらず、自己理解や他者との関係構造に影響を与える。

終盤では、評価が他者のまなざしを内包していることを明らかにし、最終的に筆者は評価を否定するのではなく、その限定性を自覚したうえで距離を保つ姿勢を提案する。

本章の読解の核心は、

- 評価の必要性から出発していること
- 「単純化」という転換点を正確に捉えること
- 「関係の固定」という深化を理解すること
- 否定ではなく再定義へ至る構造を把握することにある。

評価とは数値そのものではなく、現実を一定の仕方で切り取る行為である――その理解に到達できるかどうか、本章の到達点である。

問一

模範解答

評価は限られた資源を配分するための基準となり、複数の人や物を比較可能にして意思決定を迅速にするからである。数値や段階という共通尺度によって主観的印象を整理し、選抜や配分を効率化するとともに、努力の方向づけや行動調整の機能も果たす点で必要とされる。

別解例①

評価は大学の定員や企業のポストなど制約のある資源を分配する際の判断基準となり、比較を可能にするため必要とされる。共通尺度を用いることで恣意性を抑え、意思決定を円滑にする。また結果を示すことで行動の目標を明確にし、努力を方向づける役割も持つ。

別解例②

評価は限られた機会や資源をどのように配るかを決定するための装置であり、複数対象を共通基準で比較し迅速な判断を可能にするから必要とされる。さらに評価は人に自らの位置を知らせ、行動や努力を調整する働きも持つ点で社会の運動を支える。

自己採点チェック

- ・ 「資源の配分」に触れているか
- ・ 「比較可能性」「共通尺度」に言及しているか
- ・ 動機づけや行動調整の機能に触れているか
- ・ 単なる「便利だから」で終わっていないか

問二

模範解答

評価が単純化であるとは、本来多面的で複雑な能力や人格、努力の過程を、点数や段階といった特定の尺度へ還元し、一側面のみを強調して整理することを指す。その結果、理解は容易になるが、多くの要素が切り落とされ、全体像が歪められる可

能性を含むという意味である。

別解例①

評価の単純化とは、複雑で多面的な人間の特性や状況を、数値や記号といった一つの基準に置き換え整理することである。比較は容易になるが、他の側面が無視され、点数がその人全体を代表するかのようにならざる危険を含むという意味である。

別解例②

評価が単純化であるとは、能力や努力、偶然の影響など多様な要素を、共通尺度に従って切り取り、特定の側面のみを可視化することを指す。処理は効率化されるが、その過程で現実の複雑さが削ぎ落とされるという点で単純化なのである。

自己採点チェック

- ・ 「多面性」と「一側面」の対比があるか
- ・ 還元・切り落としの構造を説明しているか
- ・ 単なる「簡単にする」とだけ書いていないか

問三

模範解答

評価が関係を固定するとは、「優秀」「不振」などのラベルが貼られることで周囲の期待や扱い方が定まり、その人の自己理解や行動にも影響を及ぼす状態を指す。評価は過去の記録にとどまらず、将来の機会や序列を方向づけ、関係の構造を持続的に形成するという意味である。

別解例①

評価が関係を固定するとは、一度与えられた評価が周囲の見方や対応を規定し、その人の立場や機会を一定方向に固定してしまうことをいう。評価は単なる結果表示ではなく、序列や期待を持続させ、自己理解や行動選択にも影響を与える働きを持つ。

別解例②

評価が関係を固定するとは、貼られたラベルが持続し、それに基づく周囲の期待や扱い方が定着することで、人と人との関係や機会の配分が安定化してしまうことを指す。評価は記録であると同時に、未来の関係構造を形づくる力を持つという意味である。

自己採点チェック

- ラベル化の具体性があるか
- 周囲の期待や扱い方に触れているか
- 未来への影響を書けているか

問四（プロセス意識化）

模範解答

筆者の立場の転換は、「しかしその一方で、評価は必然的に単純化である。」と述べる段階で起こる。それまで評価の必要性や利点を論じていたが、ここで評価の限界と弊害へ視点を移し、評価を肯定的装置から問題を含む仕組みとして再考する方向へ転換している。

別解例①

転換は評価の利点を説明した後、「しかしその一方で」として単純化を指摘する箇所で起こる。前半では評価の必要性を強調していたが、ここから評価の限界や影響に目を向け、評価を無条件に肯定する立場から批判的検討へと論調が変化する。

別解例②

筆者の立場は、評価を社会に不可欠な装置と述べた後、「しかしその一方で」として単純化を示す場面で転換する。評価の機能を説明する段階から、その持つ制約や影響を明らかにする段階へ移行し、評価観を一面的理解から多面的理解へ広げている。

自己採点チェック

- 転換を示す接続語に注目できているか

- 前半の立場を説明できているか
- 転換後の視点の違いを具体化できているか

問五

模範解答

筆者は評価を否定しているのではなく、その性質を再定義している。評価が必要な装置であることを認めつつも、単純化であり関係を固定し他者のまなざしを含むことを明らかにする。評価を絶対視せず、その限定性を理解した上で距離を保つ態度を提案している。(158字)

別解例①

筆者は評価を廃すべきだとは述べておらず、その機能と限界を明確化する再定義を行っている。評価の利点を認めながらも単純化や固定化の側面を指摘し、無批判に受け入れるのではなく性質を理解した上で扱うべきだと示している。(158字)

別解例②

筆者の立場は否定ではなく再解釈である。評価を社会に必要な装置と認めつつ、その単純化や他者のまなざしを内包する性質を指摘する。評価を全面的に拒絶せず、その限界を意識して距離を保つ姿勢を示しているためである。(158字)

自己採点チェック

- 否定と再定義の違いを書けているか
- 本文根拠に基づいているか
- 自分の意見を書いていないか

【第四問】責任とは何か

何か問題が起きると、私たちは自然に「誰の責任か」と問いかける。事故が起これば運転者が責められ、不祥事が起これば担当者や経営者が謝罪する。学校での失敗や職場でのミスについても、原因を特定し、責任の所在を明らかにしようとする。このように、出来事と責任とを結びつける態度は、きわめて自明なもののように見える。

その背景には、原因があれば結果が生じるという因果的な理解がある。ある行為があったから事故が起きた、注意を怠ったから損害が生じた、といった説明は分かりやすい。原因を特定できれば、責任の所在も明確になるように思われる。責任とは、原因を作った者が負うものだ、という理解である。

しかし実際の出来事は、それほど単純ではない。交通事故一つをとっても、運転者の判断だけでなく、道路の設計、天候、車両の性能、周囲の状況など、多数の要因が絡み合っている。企業の不祥事も、個人の判断だけでなく、組織文化や業界慣行、制度的圧力などが影響している場合がある。結果はしばしば、複数の条件が重なったところに生じる。

このように因果関係が複雑であるならば、「原因を作った者＝責任を負う者」という図式は揺らぐことになる。ある出来事が起きたとき、そこには偶然の要素や構造的な背景が含まれているかもしれない。にもかかわらず、私たちはしばしば特定の個人に責任を集中させる。それは、複雑な因果の網の目をすべて追うことが困難だからである。

それでもなお、責任という概念は消えない。なぜなら、責任は単なる因果の帰属以上の役割を持っているからである。責任を問うことによって、私たちは出来事に意味を与え、秩序を回復しようとする。謝罪や賠償、処分といった行為は、過去を裁くと同時に、未来に向けた約束を含んでいる。責任は、再発を防ぎ、関係を修復するための契機でもある。

ここで重要なのは、責任が必ずしも「誰が原因を作ったか」という一点に還元できないという点である。たとえば、環境問題においては、個人の行動だけでなく、産業構造や消費の仕組み全体が関わっている。ここでは、特定の一人を非難するだけでは問題は解決しない。責任は個人に属するだけでなく、関係や構造の中に分散している場合もある。

もちろん、すべてを構造のせいにしてしまえば、誰も責任を負わなくなる危険もある。責任を曖昧にすれば、行為の重みも失われる。しかし逆に、すべてを個人の責任に還元すれば、偶然や構造の影響を見落とすことになる。責任をどう捉えるかは、因果の理解と不可分である。

したがって、責任とは単に原因者を指差すことではない。それは、出来事の結果を引き受け、そこから生じた影響に向き合う態度である。責任を負うとは、過去の因果を確定させること以上に、未来への応答を引き受けることである。責任は過去の帰属であると同時に、未来への関与なのである。

設問 ※各問120字程度で答えよ。

問一

私たちが出来事と責任とを自然に結びつけてしまうのはなぜか。本文に即して説明せよ。

問二

本文において、因果関係が複雑であるとはどういうことか。説明せよ。

問三

本文における因果と責任の違いを説明せよ。

問四

構造的責任とはどのような考え方か。本文に即して説明せよ。

問五

筆者の立場が単純な「原因⇨責任」理解から転換する箇所を示し、その転換内容を説明せよ。

問六

筆者は最終的に責任をどのように再定義しているか。説明せよ。

解答・解説

【全体総括】

本文は、「原因を作った者が責任を負う」という通念的理解から出発し、その理解を段階的に揺さぶり、再定義へと導く構造を持つ。

冒頭では、私たちが出来事と責任を自然に結びつける理由が、因果的思考に基づいていることが示される。原因があれば結果が生じ、その原因者が責任を負うという図式は分かりやすく、直感的である。

しかし中盤で、事故や不祥事の例を通して因果関係の複雑性が提示される。複数の条件や偶然、制度的背景が絡み合う現実においては、単純な「原因⇨責任」図式は成立しにくいことが明らかにされる。この段階が本章の第一の転換点である。

その後、責任は単なる因果の帰属ではなく、出来事に意味を与え、秩序を回復し、未来に向けた応答を可能にする社会的概念であると論が進む。構造的責任の観点が提示され、個人と制度の関係も視野に入れられる。

最終的に筆者は、責任を「原因者の特定」ではなく、「結果を引き受け、未来へ関与する態度」として再定義する。責任は過去の確定ではなく、未来への関与であるという理解に到達する。

読解の核心は、

- 因果と責任を区別できるか
 - 複雑な因果提示が何を揺さぶっているかを理解できるか
 - 責任が規範的概念であることを捉えられるか
 - 最終的な再定義が未来志向であることを把握できるか
- にある。

責任とは「誰が悪いか」を決める概念ではなく、「誰が応答するか」を問う概念である――

そこまで読み抜けるかが、本章の到達点である。

問一

模範解答

私たちは原因があれば結果が生じるという因果的理解を前提にしているため、ある行為があったから問題が起きたと考え、その原因を作った者が責任を負うと理解するからである。原因を特定できれば責任の所在も明確になるという単純な図式が直感的に分かりやすいからである。

別解例①

原因と結果を結びつける因果的発想が一般的であり、何か起きた以上、その原因となる行為者がいるはずだと考えるからである。原因が特定できれば責任の所在も明らかになるという理解は単純で理解しやすく、社会的にも共有されやすいからである。

別解例②

出来事には原因があると考え、因果的思考が前提にあるため、原因を作った者が責任を負うべきだという理解が生じるからである。行為と結果を一直線で結ぶ図式は分かりやすく、責任の所在を明確にできると感じられるからである。

自己採点チェック

- 因果的理解に触れているか
- 原因特定と責任特定の結びつきを説明しているか
- 「分かりやすさ」に触れているか

問二

模範解答

出来事は一人の行為だけで生じるのではなく、道路環境や天候、組織文化、制度的圧力など複数の要因が絡み合っ発生するということである。結果は単一の原因に還元できず、偶然や構造的条件も影響するため、因果は単純な一直線の関係ではないという意味である。

別解例①

事故や不祥事は個人の判断だけでなく、環境や制度、周囲の状況など多くの条件が重なって起こるということである。結果は単一原因に帰せず、偶然や背景構造も関与しているため、因果関係は多層的で複雑だという意味である。

別解例②

出来事は特定の一因のみで生じるのではなく、複数の条件や環境、偶然的要素が重なった結果として発生することである。そのため原因と結果を単純に一对一で結びつけることはできず、因果は多面的に構成されているという意味である。

自己採点チェック

- 複数要因に触れているか
- 偶然や構造に言及しているか
- 「単一原因ではない」ことを明確にしているか

問三

模範解答

因果は出来事がどのような要因の連鎖で生じたかを説明する関係であるのに対し、責任はその結果を誰が引き受けるかを定める社会的判断である。因果が事実の説明であるのに対し、責任は意味づけや秩序回復を目的とする点で異なる。

別解例①

因果は原因と結果の関係を事実として説明する概念であるが、責任はその結果について誰が応答し、負担を引き受けるかを定める規範的判断である。因果が説明の問題であるのに対し、責任は社会的意味づけを含む点で異なる。

別解例②

因果は出来事がどのように起こったかを示す説明であり、複数要因を含む関係を指す。一方責任は、その出来事に対して誰が結果を受け止めるかを定める概念であり、単なる原因の特定とは異なる社会的・規範的性格を持つ。

自己採点チェック

- ・ 説明（因果）と規範（責任）の区別があるか
- ・ 「引き受ける」という観点があるか
- ・ 両概念を対比できているか

問四

模範解答

構造的責任とは、特定の個人だけでなく、制度や産業構造、慣行といった関係全体が結果に関与している場合に、その構造の一部として責任を考える立場である。個人非難に還元せず、背景条件や仕組みの影響を含めて責任を捉える考え方である。

別解例①

構造的責任とは、問題が個人の行為のみならず、社会的仕組みや制度全体のあり方によって生じていると考え、その構造に属する者が一定の責任を共有すると捉える立場である。個人だけに責任を集中させない考え方である。

別解例②

構造的責任とは、結果が産業構造や制度的条件など広い枠組みによって生み出されていると理解し、その仕組みの一部を担う主体が責任を分有するという考え方である。単一の個人に還元しない責任理解である。

自己採点チェック

- ・ 個人以外の要素に触れているか
- ・ 制度・構造に言及しているか
- ・ 「共有」「分有」の発想があるか

問五（プロセス意識化）

模範解答

転換は「このように因果関係が複雑であるならば」という段落で起こる。それまで

原因を作った者が責任を負うという通念を示していたが、ここで因果の複雑性を提示することで単純図式を揺るがし、責任理解を再検討する方向へ論が転換している。

別解例①

立場は因果の複雑性を述べる段階で転換する。前半では原因者が責任を負うという図式を紹介していたが、複数要因や偶然を示すことでその単純さを崩し、責任を単なる因果帰属に還元できないとする議論へ移行している。

別解例②

筆者の転換は、因果が複雑であると指摘する部分で起こる。原因と責任を直結させる通念を提示した後、多数要因や構造の存在を示すことで、その図式を揺るがし責任の再定義へと議論を進めている。

自己採点チェック

- ・ 転換箇所を特定できているか
- ・ 転換前後の立場を説明しているか
- ・ 接続構造に注目できているか

問六

模範解答

筆者は責任を、単に原因者を指摘することではなく、出来事の結果を引き受け、その影響に向き合い未来への応答を担う態度として再定義している。責任は過去の因果確定ではなく、関係を修復し再発を防ぐための未来志向の関与である。

別解例①

責任とは、原因を作った者を非難することではなく、結果を受け止め、その後の影響に応答する姿勢であると再定義されている。責任は過去の帰属にとどまらず、未来に向けて関係を修復し秩序を回復するための行為である。

別解例②

筆者は責任を、単なる因果の帰属ではなく、結果から生じた影響を引き受け未来に

関与する態度と捉えている。責任は誰が悪いかを確定すること以上に、再発防止や関係修復へ向けた応答を含む概念である。

自己採点チェック

- 「引き受ける」という語の意味を理解しているか
- 未来志向に触れているか
- 原因指摘と区別できているか

【第五問】「硝子戸の向こう」

午後の光は、冬のそれらしく薄く、机の上に置かれた白い紙を、まるで古い骨のように乾かしていた。教室の硝子戸は閉まっているのに、廊下の気配が、どこか水のように滲んで来る。誰かが走れば走っただけ、誰かが笑えば笑っただけ、それは硝子の向こう側で音になり、こちら側では影になった。

教卓の端に、赤鉛筆が一本転がっている。持ち主のなのまま放っておかれたそれは、今しがたまで誰かの手に握られ、何かを断定した名残りのように見えた。

森下は窓際の席にいた。窓の外には、校庭の土があつて、その上を風が平たく撫でている。遠くで体育の笛が鳴った。笛の音は、なぜだかいつも、何かを始める合図というより、何かを終わらせるための音に聞こえる。

彼は、机の引き出しを一度閉め、また開けた。中にはノートと、折り目のついたプリントと、消しゴムの屑が少しある。引き出しの奥に、封筒が一つ押し込まれているのが見えた。白い封筒だが、白いだけで、清潔という感じはしない。紙が人の手の脂やため息を吸うことを、森下は知らぬ間に覚えていた。

封筒の口は、まだ糊づけされていなかった。誰かに渡すものではない。出す宛でもない。森下はそれを引き出しの奥へ押し戻し、指先の熱が紙に移る前に手を引込めた。

教室の後ろから、椅子の脚が床を擦る音がした。振り返ると、佐伯が立っていた。佐伯は背が高く、いつも首筋がまっすぐで、どこか他人の目線を避けない。森下は、佐伯のそういうところに、見えない棘のようなものを感じるときがあつた。

「まだ帰らないの」

佐伯は森下の机の上を見た。何かあるわけでもない机の上を見ながら、そこに何かがあるとでも言いたげに、視線だけが長く留まった。

「帰る」

森下は言った。しかし立ち上がらない。言葉だけが先に立ち上がってしまった、

身体はあとから追いつく気配がなかった。

「先生、さっき言ってたよ。森下、呼んでた」

佐伯はそう言うのと、別に急ぐ様子もなく、教室の出口の方へ歩いた。森下はその背を見送りながら、呼ばれる、ということの意味を考えた。呼ばれること自体は、教室の中で珍しくもない。ただ、呼ばれる場所が教室の外であり、呼ばれる理由が分からないとき、人はどうしてこんなにも、胸の奥が湿るのだろうか。

職員室は、いつも同じ匂いがした。紙と、インクと、湿ったコートと、誰かの甘い缶コーヒー。匂いはたがいに混じり合って、混じり合ったまま、何一つの顔も持たずに漂っている。森下は、職員室の入口で一度足を止めた。何かを言い訳するなら今だ、と自分の中のどこかが囁いた。しかし言い訳は、言った瞬間に自分の声として返ってくる。それが怖かった。

「森下」

呼んだのは担任の渡辺だった。渡辺は、古い眼鏡をかけていて、眼鏡の奥の目は、いつも何かを測っているようできて、測れぬものに手を伸ばすようでもあった。森下はその目を、嫌いではなかった。むしろ、そこに助けられたことがある。だからなおさら、今日はそこへ近づきたくなかった。

「こっち」

渡辺は森下を、職員室の隅の小さな面談スペースへ連れて行った。衝立の向こう側で、プリンターが唸っている。椅子に座ると、背中がすぐ冷えた。

「これ、返すよ」

渡辺は紙を一枚差し出した。小テストだった。点数が赤で書いてある。数字は、森下が予想したよりも低かった。低いというより、妙に具体的で、逃げ道のない数字だった。

森下は紙を受け取り、赤い数字を眺めた。赤は、血の色に似ていると思った。似ているのに、血と違って温かくない。冷たい赤だ、と森下は思った。赤は人を責めるためにあるのだろうか。それともただ、見えやすくするためにあるのだろうか。

「最近、どう？」

渡辺は唐突にそう言った。森下はその「どう？」の範囲を測りかねた。成績のことなのか、生活のことなのか、眠れているか、飯は食っているか。そんなものは、聞かれて答えるものなのか。

「別に」

森下の口は、勝手にそう答えた。別に、という言葉は便利だ。便利な代わりに、何も運ばない。

渡辺は、しばらく黙った。黙り方が、叱責ではない黙り方だった。森下はそれに少し救われた。しかし救われたことを悟られるのが癪で、視線を紙に落とした。

「点数だけの話じゃない。授業中、顔が、ずっと遠い」

遠い、という言い方が妙に当たっていた。森下は、顔が遠いのではなく、自分が遠いのだと思っていた。自分が自分から遠ざかって、教室のどこか高い梁の上にも座って、そこから自分の身体を眺めているような日がある。

「……家のこと？」

渡辺は言いかけて、言葉を引っ込めるように口を閉じた。森下は、その躊躇がかえって痛かった。渡辺が躊躇したのは、聞く権利がないと思ったからか。聞けば踏み込むことになるからか。あるいは、踏み込んでどうにもならないと知っているからか。

森下は紙を二つ折りにした。二つ折りにすると、赤い数字が見えなくなる。見えないだけで、なくなるわけではない。森下はその事実には、少し笑いそうになった。笑えば、何かが壊れる気がした。

「今度、放課後、少し話せる？」

渡辺は言った。誘いなのか、命令なのか、森下には判断がつかない。ただ、断ればそれで終わってしまうような気もした。終わることが望みではないのに、終わってしまえば楽だという気持ちだが、胸の中で二つに割れていた。

「……分かりました」

森下は言った。声が自分のものではないように軽かった。

職員室を出ると、廊下の光がさつきより強く見えた。硝子戸の向こうで、誰かが大声で笑っていた。笑い声は軽い。軽いから、こちらへ届く。森下は、軽さが羨ましいと思った。羨ましいと思ったことが、自分の中でひどく情けなく響いた。

教室へ戻ると、もうほとんど誰もいなかった。机の上の赤鉛筆は、まだ教卓に転がっている。森下はそれを手に取ろうとして、やめた。触れた瞬間、その赤鉛筆が自分を見ている気がしたからだ。

森下は窓の硝子に自分の顔が映るのを見た。そこには、確かに自分がいる。しかし自分は、どこまで自分なのだろう。点数の赤い数字が自分を表すのか。誰かの視線が自分を決めるのか。あるいは、自分の中の沈黙が自分なのか。

彼は鞆を持ち上げた。鞆は思ったより軽かった。軽いことが、なぜだか不安だった。重さがないと、地面に立っている気がしない。森下は、硝子戸を開けた。廊下の空気が、少しだけ温かかった。

歩き出してすぐ、背後で誰かが呼んだ。

「森下」

振り向くと、佐伯が立っていた。佐伯は手に紙を一枚持っている。それは森下の小テストと同じ紙質だった。

「これさ。俺も、やばかった」

佐伯は笑った。笑いながら、紙を軽く振った。その紙の端が風を切った。森下は、佐伯の笑いが、慰めなのか、逃げなのか、分からなかった。分からないまま、少しだけ息がしやすくなったのも確かだった。

「……そう」

森下は言い、佐伯の紙をちらりと見た。赤い数字が見えた。森下の数字より少し高い。少し、という差が残酷だ、と森下は思った。しかし残酷だと思った自分を、さらに残酷だとも思った。

「放課後、時間ある？ ちょっとコンビニ寄ろう」

佐伯は何気なく言った。何気ないというのは、誰かを救うときに一番強い顔をすることがある。森下は、断る理由を探した。探したが、断る理由はいつも、相手のためにあるようでいて、結局は自分のためにしかならない。

「……少しなら」

森下はそう答えた。言った瞬間、胸の奥の湿り気が、ほんのわずか動いた気がした。動いたのは、晴れたのではない。動いただけだ。だが、動いたことが、森下には重要だった。

硝子戸の向こう側で、夕方の光が廊下を長く引き延ばしていた。歩くたびに影が伸び、伸びた影の端が、誰かの影と触れそうで触れない。森下は、その「触れそうで触れない」距離の中に、人が生きる仕方の何かがあるように思った。

それはまだ言葉にならない。言葉にならないまま、二人は階段を下りていった。

設問 ※各問100字程度で答えよ。

問一

森下が職員室へ向かう場面で抱いている心情を説明せよ。

問二

「赤い数字」が森下にとってどのような意味を持っているか、本文に即して説明せよ。

問三

渡辺の「黙り方が、叱責ではない黙り方だった」という記述は、森下にどのような影響を与えているか説明せよ。

問四

本文において「評価」はどのように描かれているか。物語の具体描写を踏まえて説明せよ。

問五

森下の認識がわずかに変化したと読める箇所を示し、その変化の内容を説明せよ。

問六

結末における「触れそうで触れない距離」が象徴しているものを説明せよ。

解答・解説

【全体総括】

本章は、評価という行為が人の内面や関係にどのような影を落とすかを、森下という人物の一場面を通して描いた物語である。

赤い点数は単なる成績ではなく、森下にとっては自分を外側から断定する印として迫る。その数字は冷たい赤として描かれ、評価が人を固定しうる力を持つことを象徴している。

しかし物語は、評価そのものを断罪するのではない。渡辺の「叱責ではない黙り」や、佐伯とのやり取りによって、森下の内面にはわずかな揺らぎが生まれる。評価によって閉じかけた心が、他者との距離の中でわずかに動く。その微細な変化が本章の核心である。

読解のポイントは、

- ・ 赤い数字が象徴するものを捉えられるか
- ・ 黙りや距離といった間接的表現の意味を読めるか
- ・ 森下の認識の変化が劇的ではなく「わずか」であることを理解できるか
にある。

本章は、大きな事件を扱わない。

だが評価という日常的な行為が、人の自己像や関係の距離に静かに作用する様子を描くことで、これまで扱ってきた概念を感情の次元に引き寄せている。

読者がその「微細な揺れ」を感じ取れるかどうか、この章の到達点である。

問一

模範解答

森下は呼ばれる理由が分からないまま職員室へ向かい、不安と身構えを抱いている。言い訳を思いつきながらも口にできず、自分の声が自分に返ることを恐れている点から、叱責や評価を受けることへの緊張と、どこかで見抜かれることへの怖れが交

錯していると読める。

別解例①

森下は担任に呼ばれた理由を測りかね、不安を抱きつつ職員室へ向かっている。言い訳を思い浮かべながらも言葉にできないことから、叱られるかもしれない緊張と、踏み込まれることへの戸惑いが混在している心情がうかがえる。

別解例②

呼ばれるという行為に対し、森下は胸の奥が湿るような感覚を覚え、不安と警戒を抱いている。言い訳を考えつつも発することを恐れている描写から、評価されることへの緊張と、自分の内面に触れられることへの躊躇が感じられる。

自己採点チェック

- ・ 不安・緊張の根拠を本文から挙げているか
- ・ 「言い訳」や「声が返る」描写に触れているか
- ・ 感情を断定しすぎていないか

問二

模範解答

赤い数字は単なる点数以上に、森下にとって自分を測られ断定された印のように感じられている。血の色に似ているが温かくないと描かれることで、冷たい評価の象徴として示され、自分の一部を固定的に示すものとして受け止められていると読める。

別解例①

赤い数字は点数そのものよりも、森下に対する評価の可視化された印として作用している。血に似ているが冷たいと表現されることで、生身の自分とは切り離された冷徹な判断の象徴となっていると考えられる。

別解例②

赤い数字は単なる成績ではなく、自分が外部からどう見られているかを示す印とし

て森下に迫っている。温かさを持たない赤として描かれることで、人間的理解ではなく数値による断定を象徴していると読める。

自己採点チェック

- 比喩表現（血・冷たい赤）に触れているか
- 点数以上の意味を説明しているか
- 過度に単純化していないか

問三

模範解答

叱責ではない黙り方により、森下は一時的に救われる感覚を覚える。しかしその救いは安堵と同時に、自分の内面に触れられる可能性への緊張も伴っている。黙りは責めるものではなく待つ姿勢として働き、森下の揺れる心情を浮き彫りにしている。

別解例①

渡辺の黙りは非難ではなく配慮として感じられ、森下は少し救われる。しかし同時に、踏み込まれるかもしれない不安も残るため、安心と緊張が同居する状態になる。黙りは森下の内面を揺さぶる契機として作用している。

別解例②

叱責を含まない黙りは森下に安堵を与えるが、その安堵を悟られたくないという意識も生む。黙りは森下の防御を和らげつつ、自分の状態を見透かされる可能性を感じさせ、複雑な感情を呼び起こしている。

自己採点チェック

- 救いと緊張の両面を捉えているか
- 「叱責ではない」という点を踏まえているか
- 単純な安心にしていないか

問四

模範解答

物語では評価は赤い数字やラベルの形で示され、人を測り固定するものとして描かれる。同時に、それは自己理解や他者との関係にも影響を及ぼす力を持つ。評価は単なる点数ではなく、森下の内面に影を落とし、周囲との距離感を変化させる存在として描かれている。

別解例①

評価は点数という可視的な形で現れながら、森下の自己像や周囲の視線を左右するものとして描かれる。赤い数字は単なる成績ではなく、自分を断定する印となり、関係や感情にまで作用する力として表現されている。

別解例②

物語における評価は数値化された結果でありながら、森下の内面や人間関係に影響する象徴として描かれる。評価は客観的基準のように見えるが、実際には人を測り、距離や影を生む作用を持つ存在として示されている。

自己採点チェック

- 数値以上の作用を書いているか
- 内面や関係への影響に触れているか
- 抽象に逃げず具体描写に触れているか

問五（プロセス意識化）

模範解答

認識の変化は、佐伯の「俺も、やばかった」という言葉の後に見られる。森下は慰めか逃げか判断できないまま、息がしやすくなったと感じる。評価が絶対的な断定ではなく、共有され得る経験である可能性に触れ、わずかに閉じた内面が動いたと読める。

別解例①

変化は佐伯とのやり取りの場面に現れる。赤い数字に孤立していた森下が、他者も

同様の状況にあると知り、わずかに呼吸が楽になる。評価が自分だけを断定するものではないと感じ、認識に微細な揺らぎが生じたと考えられる。

別解例②

森下の変化は、佐伯に誘われた場面で示される。断る理由を探しつつも応じること、閉じていた状態が少し動く。評価の重みから完全に解放されたわけではないが、他者との関係が内面にわずかな変化をもたらしている。

自己採点チェック

- ・ 箇所を具体的に特定しているか
- ・ 変化が「わずか」であることを踏まえているか
- ・ 過度な劇的解釈になっていないか

問六

模範解答

「触れそうで触れない距離」は、人と人との関係の微妙な間合いを象徴している。完全に理解し合うわけでも、孤立するわけでもない位置に森下は立っている。評価や視線に揺れながらも、他者との距離の中で生きる姿を示す象徴的表現と読める。

別解例①

この距離は、他者とつながり得る可能性と、完全には重なれない現実の双方を象徴する。森下は孤立から抜け切っていないが、関係の芽が生じている。その微妙な間合いを示す象徴として描かれていると考えられる。

別解例②

触れそうで触れない距離は、人間関係の不確かさと希望の両面を表している。評価によって生じた隔たりは残るが、完全な断絶ではない。森下が他者と並び立つ可能性を含んだ状態を象徴している表現である。(158字)

自己採点チェック

- ・ 「距離」の比喩性に触れているか

- 孤立とつながりの両面を書いているか
- 断定的解釈になっていないか

【第六問】起こらなかったこと

三階の会議室は、昼過ぎになるといつも少しだけ乾いた匂いがした。窓は開かず、換気は機械任せで、空気は動いているはずなのに動いていないように感じられる。その中央に置かれた長机の端で、石倉は資料を揃え直していた。

今月の企画案は、彼がまとめたものだった。数字の整合は取れている。前例も調べた。だが一箇所だけ、表現を曖昧にした部分がある。「来期以降も継続的な増収が見込まれる可能性が高い」と書いた。見込まれる、と言い切らなかったのは、判断を急ぎたくなかったからだ。

会議が始まると、部長の矢野がその箇所を目を留めた。

「つまり、来期は増収でいけるってことだな」

石倉は顔を上げた。矢野の言い方は、断定に近かった。部屋の空気が少し動いたように感じられた。

本来なら、その場で言えばよかった。「可能性が高い、という意味です」と。数字の根拠を示せば、誤解は解けただろう。彼の頭の中には、説明の順序がすぐに浮かんだ。

だが、矢野はすでに次のページをめくっていた。ほかの課長も頷いている。空気は前へ進もうとしている。

石倉は口を開きかけた。喉の奥がわずかに乾いた。けれども、言葉は形を取らなかった。

「はい」と、短く答えた。

それだけで、会議は滑らかに流れていった。議事録には、「来期増収見込み」と記された。

散会后、同僚の宮本が肩を叩いた。

「うまくいったな。部長、乗り気だったじゃないか」

石倉は曖昧に笑った。うまくいった、という言葉の輪郭がはっきりしないまま、

エレベーターのボタンを押した。

数週間後、数字は予想ほど伸びなかった。原因は市場の動きにあった。外部の要因が大きく、誰か一人の責任と呼べるものではない。矢野は会議で言った。

「まあ、こういうこともある」

それ以上は何も言わなかった。

石倉も何も言わなかった。あのと、「可能性」と言い直さなかったことを思い出したのはしたが、それを口に出す場面はなかった。数字は既に過去になり、話題は次の企画へ移っていた。

ある日の夕方、石倉は再び会議室にいた。窓はやはり開かず、空気は動いているはずだった。資料の一文を見つめながら、彼は指先で紙の端をなぞった。

言えばよかったのだろうか。

そう思う一方で、あの場で訂正すれば、会議は止まっただろうとも思う。部長の流れを遮り、空気を戻すことになる。その重さを、彼は想像していた。

宮本が入ってきた。

「次の案、慎重にいこうな」

その言い方に責める響きはなかった。ただ、どこかで一度通り過ぎたものを、もう一度なぞるような調子だった。

石倉は頷いた。

会議室の空気は、前と同じようできて、少しだけ違っていている気がした。誰もそれを言葉にしない。数字は紙の上に並び、議題は次へ移る。

あのと、止めなかったこと。言い直さなかったこと。問い返さなかったこと。何も起こらなかつたはずの一瞬が、静かに残っている。

会議は今日も滞りなく終わった。

それでも、石倉は帰り際、会議室のドアノブに触れたまま、ほんの一拍だけ立ち止まった。

そして、そのまま手を離した。

設問 ※各問100字程度で答えよ。

問一

石倉が「可能性が高い」と表現した意図を説明せよ。

問二

会議中に石倉がその場で言い直さなかった理由を説明せよ。

問三

本文において「空気」はどのような役割を果たしているか説明せよ。

問四

数字が伸びなかった後、なぜ強い非難が生じなかったのか説明せよ。

問五

本文で「起こらなかったこと」を一つ特定し、それがもたらした影響を説明せよ。

問六

結末の「ドアノブに触れたまま立ち止まる」場面の意味を説明せよ。

解答・解説

【全体総括】

本章は、明確な事故や対立を描かない。代わりに、「言い直さなかったこと」「問い返さなかったこと」といった起こらなかった行為に焦点を当てている。

石倉は「可能性が高い」と書いたが、それは断定を避けるための慎重な表現であった。しかし会議の流れの中でそれは断定として受け取られ、彼は言い直す機会を持ちながらも、その空気を止めなかった。

数字が伸びなかった後も、誰か一人の明確な過失とはされず、責任は拡散する。だが、その不在の中で、会議室の空気はわずかに変質する。

本章の読解の核心は、

- 「言わなかった」という消極的行為を行為として捉えられるか
 - 空気や流れが判断に与える影響を理解できるか
 - 起こらなかったことが関係に残す痕跡を言語化できるか
- にある。

ここで問われているのは、出来事ではなく、出来事にならなかった一瞬である。

問一

模範解答

石倉は将来の増収を断定することを避け、判断の余地を残すために「可能性が高い」と記した。数字の整合は取れていたが外部要因を考慮し、過度な期待や誤解を招かぬよう慎重な立場を示そうとした意図があったと読める。

別解例①

石倉は来期増収を確実とは言い切れないと判断し、責任ある表現として断定を避けた。市場の動向など不確定要素を踏まえ、見通しを示しつつも余地を残すために「可能性が高い」とした意図があったと考えられる。

■別解例②

増収を前提とする空気を作らぬよう、石倉は慎重な言い回しを選んだ。予測には外部要因が絡むため、断定的表現ではなく「可能性が高い」として判断の幅を残そうとする姿勢がうかがえる。

自己採点チェック

- ・ 「断定を避けた」点を書いているか
- ・ 外部要因や慎重さに触れているか
- ・ 単なる曖昧さと誤解していないか

問二

模範解答

石倉は誤解を正すことができたが、会議の流れを止める重さを感じて言い直さなかった。部長の発言に皆が頷く空気の中で、自分だけが流れを遮ることへの躊躇が働き、空気を優先した結果、沈黙を選んだと読める。

別解例①

誤解に気づきながらも、石倉は会議の進行を妨げることがためらった。既に部長が次へ進み周囲も同調する状況で、流れを戻す責任の重さを想像し、あえて訂正せず短く応じたと考えられる。

別解例②

石倉は説明の順序を思い浮かべながらも、会議の勢いを止めることに心理的抵抗を覚えた。空気が前へ進む中で、断定を修正する行為が場を乱すと感じ、沈黙を選択したと読める。

自己採点チェック

- ・ 空気や流れへの言及があるか
- ・ 「できなかつた」ではなく「選んだ」構造になっているか
- ・ 単なる弱さに矮小化していないか

問三

模範解答

本文で空気は、個人の判断を左右する無言の圧力として描かれる。会議が前へ進むとする流れや周囲の頷きは、石倉の発言を抑制する働きを持ち、言葉を発するか否かを決定づける場の力として作用している。

別解例①

空気は場の方向性を示す力として描かれる。会議が滑らかに進む状況は訂正を困難にし、石倉の選択に影響する。明示的な命令はなくとも、無言の同調が個人の行動を制限する役割を果たしている。

別解例②

本文における空気は、集団の合意が形になる前の流れを示す。部長の断定や周囲の反応が空気を前進させ、それが石倉の言い直しを抑える要因となる。空気は場の力を象徴している。

自己採点チェック

- 空気を比喻でなく機能として説明しているか
- 個人への影響を書いているか
- 抽象に逃げていないか

問四

模範解答

数字が伸びなかった原因が市場の動きなど外部要因にあり、特定の個人の過失とは断定できなかつたため、責任は拡散した。そのため強い非難は生じず、出来事は流された。しかし沈黙の記憶だけが静かに残ったと読める。

別解例①

結果が外部要因に左右されたため、誰か一人の明確な責任としにくく、非難は強まらなかつた。因果が単純でないことで責任は曖昧となり、表面的には穏やかに収束

したと考えられる。

別解例②

市場の動向など複数の要因が絡み、個人の誤りと断定できなかつたため、強い責任追及は避けられた。因果の複雑さが非難を弱め、問題は明確化されぬまま次へ移ったと読める。

自己採点チェック

- 外部要因に触れているか
- 責任の拡散を書いているか
- 単に「優しかったから」としていないか

問五

模範解答

起こらなかったのは、石倉が「可能性」と言い直し、会議を止める行為である。その不在により誤解は修正されず、表面的には何も起こらなかったが、場の信頼や空気にわずかな変化が残ったと読める。

別解例①

石倉が断定を修正しなかったことが起こらなかった出来事である。訂正がなされなかつたため認識のずれは解消されず、責任は曖昧なまま残り、会議室の空気に静かな違和感を生んだと考えられる。

別解例②

部長に対し問い返す発言がなされなかつたことが不在である。その結果、誤解はそのまま共有され、誰も責められない形で問題が流れたが、関係の質は微妙に変わったと読める。

自己採点チェック

- 「起こらなかった行為」を具体化しているか
- 影響を関係や空気の変化として書いているか

- ・ 破局的結果を書いていないか

問六

模範解答

ドアノブに触れ立ち止まる場面は、言えなかった一言への逡巡を象徴する。会議は滞りなく終わったが、石倉の内には未解消の感覚が残る。その一拍は、行為に至らなかつた選択を意識する瞬間を示している。

別解例①

立ち止まる一拍は、あの時の沈黙を思い返す時間を象徴する。外面は平穏でも、内面では問いが残っている。ドアノブに触れたままの姿は、行動にならなかつた決断の重みを示していると読める。

別解例②

この場面は、何も起こらなかつた出来事が石倉の中に残存していることを示す象徴である。立ち止まる動作は、過去の沈黙と向き合う瞬間であり、未完の選択を意識する姿を表している。

【第七問】 検定という言葉

霞が関の庁舎は、外から見ると均整の取れた灰色の箱のようだが、中に入ると廊下は意外に細く、蛍光灯の白さがどこか乾いている。三月の終わり、文部科学省の一室では、来年度使用予定の高等学校歴史教科書の検定作業が佳境を迎えていた。

机の上には分厚い原稿束が積まれている。赤や青の付箋がところどころに貼られ、細かな字で書き込みがされていた。その中の一冊を、吉岡は静かに開いた。教科用図書検定審議会の専門委員から付された意見が、欄外に並んでいる。

「史料の出典をより明確に」

「近年の研究動向への言及を補うこと」

「表現が断定的に過ぎるのではないか」

いずれも検定意見としては珍しいものではない。吉岡は、それらを読みながら、出版社から提出された修正案と照らし合わせていった。

あるページで手が止まった。近現代史の一節である。そこには、戦後の国際関係の緊張についての記述があり、特定の出来事に関する評価が一文で示されていた。原文は簡潔で、断定的な響きを持っている。

専門委員の意見は、「表現の精緻化を要する」とだけ記されていた。

吉岡は、椅子の背にもたれた。精緻化、という言葉は便利だ。断定を弱めることも、補足を求めることも、その中に含めることができる。

教科書検定は、憲法や教育基本法の理念に基づき、学習指導要領に適合しているかどうかを審査する制度である。政治的中立性、学問的正確さ、児童生徒の発達段階への配慮。条文の言葉は整然としている。

しかし、実際の作業は条文ほど単純ではない。

出版社の編集者は、前回の検定で付された意見を踏まえ、慎重に原稿を書いている。専門委員は、それぞれの専門分野の研究状況を背負っている。さらに、近隣諸国の政府や報道が教科書の記述に反応することも、過去に幾度もあった。

吉岡は、机上の資料の端に置かれた新聞の切り抜きを見た。数日前、ある海外メディアが、日本の教科書における歴史叙述について論評していた。そこには、特定の語の使用をめぐる批判が掲載されている。

もちろん、検定は外国政府の意向に従って行われるものではない。制度上、検定の基準は国内法に定められている。だが、国際関係の緊張が高まれば、その波は教科書の一文にも影を落とす。

吉岡は、問題の一文を読み直した。

断定的な語を、そのまま残すことは可能である。研究上の有力な見解であることに間違いはない。だが、別の立場からの議論が存在することも事実だった。

「〜とされている」と書き換える。

あるいは、「〜との指摘もある」と補う。

どの言い回しが、最も適切か。

適切、という言葉はここでも便利だ。だが適切さは、誰にとってのものなのか。昼過ぎ、検定担当課の打ち合わせが開かれた。課長は淡々と進行する。

「当該箇所については、専門委員の意見を踏まえ、出版社に修正を求める方向で整理したい」

誰も異論は唱えなかった。吉岡も、資料に目を落としたまま頷いた。

修正を求める。それは削除ではない。書き直しである。だが書き直しは、時に重さを持つ。

会議が終わった後、吉岡は一人で原稿を見返した。出版社の編集担当者は、若い女性だった。数日前の電話で、彼女はこう言っていた。

「事実関係については、できる限り複数の研究を参照しました。ただ、生徒が読みやすいよう、文はなるべく簡潔にしています」

簡潔さと精緻さは、必ずしも両立しない。

吉岡は、パソコンの画面に検定意見の文案を打ち込んだ。

「当該箇所については、近年の研究状況を踏まえ、より多角的な視点を補うなど、

表現の精緻化を図ること」

その一文を、何度か読み返す。

この文は、何を守り、何を变えるのか。

吉岡は、行政官としての自分と、かつて大学院で歴史を学んだ自分を思い出した。研究室では、論文の脚注一つをめぐって議論が交わされた。ここでは、脚注は削られ、本文の一語が問われる。

夕方、窓の外が少し赤みを帯びた。庁舎の窓は開かない。外の空気の温度は分からない。

吉岡は、決裁文書に目を通し、印を押した。書類は次の机へ回る。やがて出版社に通知が届くだろう。編集者は修正案を作り、再提出する。

教科書は来春、教室に並ぶ。

そこに書かれた一文を、生徒はどのように読むのか。

その背後にあるやり取りを知る者は、ほとんどいない。

吉岡は、机の上の原稿を閉じた。

言葉は残る。

だが、その言葉に至るまでの迷いは、記録には残らない。

設問 ※各問100字程度で答えよ。

問一

本文において教科書検定制度はどのような理念に基づくものとして描かれているか説明せよ。

問二

「精緻化」という言葉が本文中で果たしている役割を説明せよ。

問三

吉岡が問題の一文の言い回しに迷う理由を説明せよ。

問四

本文において国際情勢はどのように描かれているか説明せよ。

問五

吉岡が決裁文書に印を押すまでの過程で、本文に明示されていないが読み取れる葛藤を説明せよ。

問六

「言葉は残る。だが、その言葉に至るまでの迷いは、記録には残らない。」の意味を説明せよ。

解答・解説

【全体総括】

本章は、現代日本の教科書検定制度を背景に、制度の理念と現実の運用の間に生じる微妙な調整の過程を描いている。

教科書検定は、法令に基づき政治的中立性や学問的正確さを確保する制度として位置づけられている。しかし実際の作業では、研究動向、表現の精度、生徒への配慮、国内外の反応など、多層的な要素が絡み合う。

吉岡は一文の修正をめぐり、断定を残すか、補足を加えるかに迷う。その迷いは制度の逸脱ではなく、制度の内部で生じる責任の重さに由来する。

本章の読解の核心は、

- ・ 「精緻化」という言葉の含意
 - ・ 制度と個人の立場の重なり
 - ・ 国際情勢が直接命令ではなく影として作用する構造
 - ・ 記録に残らない葛藤の存在
- を捉えられるかにある。

ここで問われているのは、正誤ではなく、言葉を整えるという行為の複層性である。

問一

模範解答

本文では教科書検定制度は、憲法や教育基本法の理念に基づき、政治的中立性や学問的正確さ、発達段階への配慮を確保する仕組みとして描かれている。国内法に基準を置きつつ、公教育に用いる教材の適切性を審査する制度と位置づけられている。

別解例①

教科書検定は、法令に基づき学習指導要領への適合や政治的中立性を確認する制度として示されている。学問的正確さと生徒への配慮を両立させ、公教育にふさわし

い内容かを審査する理念に立つものと描かれている。

別解例②

本文では検定制度は国内法を根拠とし、政治的中立性や研究動向への適合を確保する仕組みとされる。教育内容の公的責任を担う制度として、教科書の表現や内容を審査する理念に基づくものと示されている。

自己採点チェック

- 憲法・教育基本法・中立性に触れているか
- 国内法に基づく制度である点を書いているか
- 批判や評価に偏っていないか

問二

模範解答

「精緻化」は断定を弱めることも補足を求めることも含み得る曖昧な語として用いられ、直接的な削除や否定を避けつつ修正を促す役割を果たしている。制度的判断を柔らかく伝えるための行政的表現として機能していると読める。

■別解例①

精緻化という語は、明確な誤りと断定せずに修正を求めるための緩衝的表現として働いている。断定的な叙述を調整する余地を示しつつ、制度上の中立性を保つための言葉として機能している。

■別解例②

本文の精緻化は、表現を削るか補うかを明示せず調整を求める便利な概念として描かれる。強い評価を避けながら修正を促す行政的語彙であり、多様な意味を含む柔軟な言葉と読める。

自己採点チェック

- 曖昧さや緩衝性に触れているか
- 削除ではなく修正である点を書いているか

- ・ 批判的断定になっていないか

問三

模範解答

吉岡は研究上有力な見解を残すことも可能である一方、別の立場が存在する事実も認識しているため、断定を維持するか補足するかで迷っている。学問的正確さと制度上の配慮の間で適切な表現を選ぶ責任を感じているからである。

別解例①

断定的叙述は研究に基づくが、異なる議論も存在するため、吉岡は単純に維持できない。制度の理念と現実の影響を踏まえ、どの言い回しが妥当かを慎重に判断しようとしているため迷いが生じている。

別解例②

有力な研究見解を尊重しつつも、多角的視点への配慮が必要であることを理解しているため、吉岡は表現に迷う。断定を残すか緩めるかが、制度的責任に関わると自覚しているからである。

自己採点チェック

- ・ 有力見解と別立場の両方に触れているか
- ・ 制度的責任を書いているか
- ・ 単純な優柔不断にしているかないか

問四

模範解答

国際情勢は直接的な命令としてではなく、報道や過去の反応という形で影のように描かれる。検定基準は国内法に基づくが、国際的緊張が教科書の一文に影響を及ぼし得る環境として示されている。

別解例①

海外メディアの論評などを通じ、国際情勢は制度外からの圧力としてではなく、無視できない背景として描かれる。検定は国内基準に従うが、その周囲に国際的反応が存在する構図が示されている。

別解例②

国際関係の緊張は、直接的介入ではなく、波のように教科書記述に影を落とす存在として表現される。国内制度の枠内で行われる検定に、外部環境が間接的影響を持つ状況が描かれている。

自己採点チェック

- ・ 直接命令ではない点を書いているか
- ・ 国内制度との関係を示しているか
- ・ 単純な外圧構図にしていないか

問五

模範解答

吉岡は行政官として制度を運用する立場と、研究者としての感覚の間で葛藤していると読める。断定を残す学問的立場と、多角的視点を求める制度的責任の間で迷い、どの表現が最も妥当かを自問している葛藤が示唆されている。

別解例①

本文では明示されないが、吉岡は制度の理念と個人的研究経験との間で揺れていると読める。修正を求めることが何を守り何を変えるかを考えながら、決裁に至るまで内的葛藤を抱えていたと推測できる。

別解例②

吉岡は公的責任を担う行政官としての判断と、学問的誠実さを重んじる立場との間で葛藤している。表現の修正が持つ意味を考えつつ、制度の枠内で最善を探る心理的緊張が読み取れる。

自己採点チェック

- ・ 行政官と研究者の二面性に触れているか
- ・ 本文の描写から推測しているか
- ・ 断定的批判になっていないか

問六

模範解答

最終文は、教科書に残るのは完成した言葉のみであり、その背後にある検討や迷いは表に出ないことを示す。制度の決定は記録されるが、そこに至る個人の思考過程は不可視であるという構造を表している。

別解例①

言葉は公的記録として残るが、調整や逡巡は記録されないことを示す文である。制度の成果だけが可視化され、判断に至る過程は見えないという行政の性質を象徴している。

別解例②

完成した文章は教室に届くが、その背後の議論や迷いは消えることを示す表現である。公的決定の表面と、その内側の思考過程の乖離を象徴的に述べている。

【第八問】 言いすぎた夜

あの夜のことを、私はもう何度も思い返している。思い返すたびに、言葉の順序が少しずつ入れ替わる。彼女が先に言ったのか、私が先にため息をついたのか。それさえも、今でははっきりしない。

きつかけは些細なことだった。夕食の後、彼女が皿を流しに運びながら、「最近、帰りが遅いね」と言った。それは責める口調ではなかったと思う。少なくとも、そのときの私はそう受け取らなかった。

私はコートを椅子にかけ、ネクタイを外しながら、「仕事だから」と答えた。実際、仕事は忙しかった。年度末で、数字の締めもあった。嘘は言っていない。

彼女は、しばらく黙っていた。蛇口の水の音だけが台所に響いた。その音がやけに長く感じられたのを覚えている。

「前は、忙しくても、ちゃんと話してくれたよね」

その一言で、私は急に居心地が悪くなった。責められている気がしたのだ。実際には、彼女は静かに言っただけかもしれない。だが私は、そこに非難の色を見た。

「話してるだろ」

私はそう言った。言いながら、自分の声が少し強くなったのが分かった。

彼女は振り向いた。何かを言いかけて、やめたように見えた。その一瞬を、私は今も思い出す。あのとき彼女が言おうとした言葉が何だったのか、私は知らない。知ろうともしなかった。

「何が不満なんだよ」

私は続けた。言いすぎた、という感覚は、口から出てしまってからやって来る。だがそのときの私は、まだ自分が言いすぎているとは思っていなかった。

「不満っていうか……」

彼女はそう言って、言葉を探すように視線を落とした。私はその間を待てなかった。

「俺だって疲れてるんだよ」

それは事実だった。だが事実であることと、言ってよいこととは別だということ
を、そのときの私は考えなかった。

彼女は何も言わなくなった。水を止め、手を拭き、食器を棚に戻す。その動きが
やけに丁寧だった。丁寧すぎる、と私は思った。

私はリビングに戻り、テレビをつけた。画面の光が部屋を白く照らした。音は出
していなかったが、ニュースキャスターの口が動いているのが見えた。

しばらくして、彼女が隣に座った。距離は、普段と同じくらいだったはずだ。だ
が、空気は違っていた。

「私、あなたと話したいだけなんだけど」

その言葉を、私はどう受け取ったのか。

あのときの私は、「話したいだけ」という部分よりも、「あなたと」という部分に
引っかかった。何かを試されているような気がしたのだ。私は身構えた。

「じゃあ、今話してるじゃないか」

そう言ってしまった。

彼女は小さく息を吐いた。その音はため息だったのかもしれないし、ただの呼吸
だったのかもしれない。私はその違いを確かめなかった。

その夜、私たちはそれ以上言い争うことはなかった。彼女は寝室に入り、私はソ
ファでしばらく横になった。部屋の明かりは消していなかった。

翌朝、彼女はいつも通りに朝食を用意した。味噌汁の味も変わらなかった。私た
ちは普通に言葉を交わし、私は仕事へ向かった。

何も壊れてはいない。

だが、あの夜以降、彼女が「最近どう？」と聞くことはなくなった。

代わりに、「お疲れさま」とだけ言うようになった。

私はその変化に、最初は気づかなかった。気づいたのは数週間後だ。彼女が私の
帰宅時間を尋ねなくなり、予定を確認しなくなり、ただ静かに夕食を並べるように

なっところ、私はふと、あの夜の言葉を思い出した。

私は本当に責められていたのだろうか。

それとも、彼女はただ、私の近くに座りたかっただけなのだろうか。

思い返すと、彼女は「不満」とは言っていない。私が先にその言葉を持ち出したのだ。

私は今も、あの夜の台所の水音を思い出す。あれは、沈黙を埋める音だったのか、それとも、私の言葉を薄める音だったのか。

言いすぎたのは、どの一言だったのか。

それとも、言わなかった一言があったのか。

私はまだ、確かめていない。

設問 ※各問100字程度で答えよ。

問一

語り手が彼女の言葉を「責められている」と受け取った理由を説明せよ。

問二

「事実であることと、言っただけのこととは別だ」という一文の意味を説明せよ。

問三

彼女が何も言わなくなった場面の意味を説明せよ。

問四

「あの夜以降、彼女が『最近どう?』と聞くことはなくなった」とあるが、この変化が示すものを説明せよ。

問五

本文における語り手の認識の偏りを一つ挙げ、その内容を説明せよ。

問六

結末の「私はまだ、確かめていない。」の意味を説明せよ。

解答・解説

【全体総括】

本章は、恋人同士の些細な口論を通じて、言葉が関係に与える影響と、語り手自身の解釈の偏りを描く私小説的物語である。

語り手は彼女の発言を「責め」と受け取り、防衛的に反応するが、本文には彼女が明確に非難したとは断定できない描写も多い。語り手の「疲れている」という事実は否定されない一方、それをどう言葉にするかが関係を左右する点が示される。

口論は表面上収束し、「何も壊れてはいない」と語り手は言う。しかしその後、彼女の問いかけが消え、「お疲れさま」だけが残るといふ微細な変化が生じる。破局ではなく、距離の質が変わることが本章の核心である。

読解のポイントは、

- 事実と解釈の区別
 - 語り手の自己正当化の構造
 - 沈黙や丁寧な動作に込められた意味
 - 変化が遅れて現れること
- を捉えられるかにある。

問一

模範解答

彼女の言葉自体は静かだが、「前は話してくれた」と過去との比較が示され、語り手はそれを自分への否定や不足の指摘として受け取った。さらに仕事で疲れている状況で居心地の悪さが増し、非難の色を読み込んで防衛的に反応したと読める。

別解例①

「最近遅い」「前は話してくれた」と続く発言を、語り手は自分の在り方への不満の表明と解釈した。疲労や緊張がある中で、責める口調ではない可能性を十分に確かめず、先回りして非難として受け止めたためだと考えられる。

別解例②

語り手は彼女の沈黙や視線の落とし方を、責めや不満の前触れとして読んでしまい、言葉以上の意味を背負わせた。その結果、比較の言い回しに攻撃性を感じ、試されているような感覚も加わって、防衛として強い言葉を返したと読める。

自己採点チェック

- 発言の「比較」に触れているか
- 語り手側の疲労・居心地悪さを根拠にしているか
- 彼女の意図を断定しすぎていないか

問二

模範解答

語り手が「疲れている」のは事実だが、その事実を相手を押し返す言葉として用いれば、相手の気持ちや関係を傷つけ得るという意味である。事実は免罪符ではなく、言葉の使い方が相手への配慮や対話の可能性を左右することを示している。

別解例①

真実であっても、それをどの場面での語調で言うかによって、相手に与える意味は変わるということだ。疲労は正当な理由でも、相手の訴えを退ける形で言えば関係を冷やす。事実と適切な伝え方は別だと示している。

別解例②

語り手の言葉は嘘ではないが、事実を盾にして相手の言葉を封じることになり得る、という指摘である。正しさの主張が対話を止める場合があり、事実の有無より、言葉が関係にどう作用するかが問題だと示している。

自己採点チェック

- 事実が「免罪符」にならない点を書けているか
- 言葉の作用（退ける／封じる）に触れているか
- 道徳説教に寄りすぎていないか

問三

模範解答

彼女の沈黙は、単なる言葉不足ではなく、語り手の強い言葉により対話の余地が狭まったことを示す。食器を丁寧に残す動作は感情を抑える仕草とも読め、言い争いを続けない選択である一方、言葉が届かない距離の発生も示唆している。

別解例①

彼女が言葉を止めたのは、理解されないと感じたか、これ以上言えば傷つくかと判断したためとも読める。水音や丁寧な動作が強調されることで、沈黙が場を保つ働きをしつつ、内面の隔たりが広がった可能性が暗示されている。

別解例②

沈黙は「反論しない」ことではなく、対話を一旦終える行為として描かれている。丁寧すぎる動作は感情の処理の仕方を示し、表面上は争いが収束するが、言葉が交わされないまま何かが残存することを示すと読める。

自己採点チェック

- 沈黙を「行為」として捉えているか
- 丁寧な動作の意味に触れているか
- 断定ではなく可能性として書けているか

問四

模範解答

口論後、彼女の問いかけが「お疲れさま」に置き換わるのは、関心が消えたというより、踏み込むことを避け距離を保つ態度への変化を示す。表面は平穏でも、対話の入口が閉じ、関係の質が静かに変わったことが示唆されている。

別解例①

「最近どう？」は相手に近づく問いだが、それがなくなったことで、彼女が対話を

控えるようになったことが分かる。破局ではなく、傷つかないための自己防衛として距離を取る変化とも読め、関係が淡く冷える兆しを示している。

別解例②

問いかけが消えるのは、語り手の反応により「話しても返ってこない」と感じた可能性を示す。代わりの定型句は礼儀として関係を維持するが、互いの内面に触れる回路は弱まる。壊れずに変質する関係が描かれている。

自己採点チェック

- ・ 「破局」ではなく「変質」を捉えているか
- ・ 定型句の意味（距離・防衛）に触れているか
- ・ 彼女の心情を断言しすぎていないか

問五（語りの信頼性）

模範解答

語り手は彼女の発言が「責める口調ではなかった」と言いつつ、直後に「非難の色を見た」と述べ、相手の言葉を自分の防衛の枠で解釈している。ため息か呼吸かの区別を確かめないなど、相手の意図を検証せず推測で意味づけする偏りがある。

別解例①

語り手は「嘘は言っていない」と強調し、事実の正しさを根拠に自分の反応を正当化しがちである。一方で相手の沈黙の意味は確かめず、試されている気がしたなど主観を積み重ねている。事実と解釈の混同が偏りとして読める。

別解例②

語り手は相手の言葉を「責め」と受け取る一方、相手が何を言おうとしたかは「知らない」として放置している。つまり相手の内面を想像しながら確認は避け、自分の居心地の悪さを中心に意味づけする偏りがあると読める。

自己採点チェック

- ・ 具体箇所（非難の色／確かめない）を挙げているか

- ・ 事実と解釈の混同を指摘できているか
- ・ 語り手を断罪しすぎているか

問六

模範解答

語り手は、あの夜の言葉のどれが決定的だったか、また彼女が何を言おうとしていたかを理解し切れていない。思い返すだけで順序が揺れ、相手に問い直す行為はしていないため、関係の変化を自覚しつつも対話で確かめる段階に至っていないことを示す。

別解例①

語り手は原因を反省するようできて、実際には彼女に確認していない。記憶の再構成の中で迷い続け、沈黙の意味も確かめぬままにしている。つまり「分かったつもり」を避けつつも、決定的な対話を先送りしている状態を表す。

別解例②

この一文は、問題が解決していないことの告白である。言いすぎた言葉を特定できず、言わなかった一言の有無も確証がない。語り手は自問を続けるが、相手との確認という行為に踏み出していないため、距離が残ったままであることを示す。

おわりに

今回もここまでお疲れさまでした！

この冊子は特に書かれていないことの記述に重点を置きました。最近では、とくに共通テストなどにおいて、書いてあること以外は考慮してはダメ、などのアドバースも聞かれますね。

しかし、そもそも文章は書いていないことも伝わる媒体です。程度の差はありますが、言葉を並べただけで、あるいはその並べ方だけで、書き手の意図や登場人物の気持ち、事柄の意味などが表現されるのです。このことは皆さんの日常生活のなかでもたっぷり体験することができますから、ぜひ少し注意深く「言葉の使われ方」を意識してみてください。

前回の問題集（⑥）のあとがきで、漢字練習用の問題集も作成したい旨を書いておりますが、特徴的なものにしたいたい構想があるので、おそらく遠い将来になるような気がします。もしお待ちいただけの方がいらっしゃれば、どうぞ気長にお待ちください。受験生や学生の方は、無理に待たず学習を進めて、合格など望む進路を進んでくださいね！